

序——森政稔『〈政治的なもの〉の遍歴と帰結』をめぐって——

網谷 壮介

本エッセイ企画は、2014年に出版された森政稔『〈政治的なもの〉の遍歴と帰結——新自由主義以後の「政治理論」のために』（青土社、2014）をめぐって、三名の若手研究者に寄稿を依頼し、筆者にそれらに対する応答を頂いたものである。

数年前に川崎修『「政治的なもの」の行方』（岩波書店、2014）が、また最近では井上彰・田村哲樹編『政治理論とは何か』（風行社、2014）が出版され、「政治的なもの」の学問的位置づけ・意義が問い直されている。これは日本の文脈だけに限ったことではなく、欧米圏でもRaymond Geuss, *Philosophy and Real Politics* (Princeton: Princeton University Press, 2008)などをきっかけにして、規範的政治理論の隆盛とその限界について議論が生じている。こうしたなかで『〈政治的なもの〉の遍歴と帰結』は、「政治的なもの」の可能性と限界を論じているだけでなく、とりわけ「政治的なもの」の優越を論じる論者が往々にして19世紀以降に勃興してきた「社会的なもの」への顧慮を欠いてしまうという陥穽を指摘し、両者のありうべき関係を論じるための道筋をつけているという点で、格別の意義を持つと考えられる。「政治的なもの」の鋭い問い直しを含む本書に対して、政治哲学・理論・思想史を研究する者はどのように応答していくことができるのか。本企画は、三名の若手研究者がそれぞれの視座からの応答と考察を試みるものである。

提案者は2015年3月に、著書出版にちなんだ研究会をオーガナイズし、本企画の執筆者である大井赤亥氏、小野寺研太氏（両相関出身）、金慧氏（千葉大学）に報告を依頼した。本企画はこの研究会に基づくものである。当日参加して頂いた森氏を含む多くの方々へ感謝する。『〈政治的なもの〉の遍歴と帰結』が論じる対象は各章ごとに時代も地域も様々であるが、大井氏は19世紀イングランド、小野寺氏は日本の市民社会論、金氏はアレントとカントを専門にされており、それぞれの専門分野の視座から、あるいはそこから独立に、本書について論じて頂いた。本書はもとより、三名の考察、筆者からの再応答も含めて、刺激的かつ示唆に富むものである。